

SRU(Super Regional University)
=地域で学び地域のあらゆる
人々に学びの場を提供すると
ともに、世界標準の研究力に
よって地域と世界を繋ぎ、
地域と世界を変えることの
できる大学

HELLO!
SENPAI

どんなものでも薄く、美しく。
科学の進歩に貢献する
薄片技術者

【研究のススメ!】
「詳述」でひらく
新しい国語の授業を考える

【研究のススメ!】
革新的な触媒技術で、
カーボンニュートラルの実現に挑む!

【ピックアップ高知大学生】
マキノジン企画開発 塩田貴志さん

【それいけ! プロジェクト】
地域から医療を考える
「シン・家庭医道場」とは?

Kochi University TOPICS



TAKE FREE

入試・イベント情報

「出願直前!オンライン学部説明会・個別相談会」開催!

出願にそなえて、高知大学の学部・学科の概要やキャンパスライフについて聞いてみよう!

【学部説明会】

教員や在学生から、学部で学べる内容を説明します。
受験生の方の質問にもお答えします!

1月26日(月)
17:00~18:00 農林海洋科学部
18:00~19:00 教育学部

1月27日(火)
17:00~18:00 人文社会科学部、医学部看護学科
18:00~19:00 地域協働学部



【個別相談会】

アドミッション担当職員が、
受験に向けてのお悩みなど
個別にご相談に対応します。

1月28日(水)~30日(金)
16:00~19:00の間
各回15分程度



お申し込みは受験生サイトから [進学相談会 高知大学](#)

もっと高知大学を知るために!

●動画で見る高知大学

「YouTube」・「夢ナビ」で学科紹介や講義動画を視聴できます。



●デジタルパンフレット

大学のパンフレットや各学部の
パンフレットを閲覧できます。



公式SNSで情報発信中!

イベントの情報やキャンパスライフなどをご紹介!学生広報スタッフによる投稿もあります。



高知大学のラジオコーナー

FM 高知 81.6MHz 【毎月】
「Monthly 高知大学」 第4金曜日 10時15分~

放送中

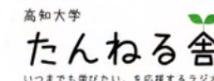
高知大学の教育・研究・地域貢献等の情報をFM高知でお届けしています。
ラジオ聴取用アプリ「radiko」をダウンロードしていただくと、スマホや
パソコンで全国どこでも視聴いただけます。 YouTubeで配信!



高知大学たんねる舎 ~いつまでも学びたい、を応援するラジオ~

この番組は、いつでもどこでも、いつまでも楽しく学び続けていきたい
皆さんを応援します。「たんねる」は幅多弁(土佐弁)で、「調べる」、
「探究する」、「訪れる」という意味。「たんねる舎」は、「知を探究し、
知を訪れる学びの場」という想いが込められています。

YouTube、Podcastで配信中!



「高知大学マガジンSRU」 アンケートご協力をお願い

アンケートにご協力いただいた方の中から
抽選で3名の方に高知大学オリジナルグッズ
をプレゼントします。(当選者の発表は賞品の
発送をもってかえさせていただきます)

回答期限: 令和8年3月31日

こちらを
チェック



高知大学広報・校友課 2025年11月発行

〒780-8520 高知市曙町2-5-1

TEL: 088-844-8100

FAX: 088-844-8033

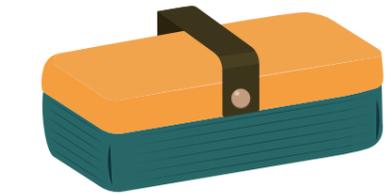
E-MAIL: kh13@kochi-u.ac.jp

広報誌SRU
バックナンバーはこちら



※誌面の学年と役職は
制作時のものです。





「詳述」でひろく 新しい国語の授業を考える

小学校から高校まで学ぶ「国語」。なじみ深い授業の一方で、学びたい、教えることの難しさを指摘されることも多い教科です。

高校教師から高知大学の教員へと転身した辻尚実講師は、国語の授業をもっと楽しく、深く学べるものにしようと、教育学部で研究に取り組んでいます。

苦手の克服が研究のきっかけに

国語という教科は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三つの領域で構成されています。辻尚実先生は中でも「読むこと」に関心をもって授業づくりを研究しています。「生徒が文章をどう読んだのか、読んだことがどのような意味をもったのかは、生徒が表現したものをみることでしかわかりません。読んだことを生徒にどのように書かせるか、どのような観点で書いていけば生徒の読みや思考が深まるのかを研究しています」と辻先生は説明します。

研究のきっかけは、「私の苦手意識」と話す辻先生。そもそも、古典文学を学びたいと、大学は文学部を選択し、教師になつてからも文学作品が教材の授業には手ごたえを感じていたといいます。「しかし、社会問題や



「私は、高校生は詳述することで読みを深めると考えました。認知心理学の分野では文章理解の研究が進んで、そこでは言語表現には隙間があり、言葉と言葉の間を埋めていくことが大切だといわれています。これは、高校の評論文にも当てはまるんじゃないかと思っています」と辻先生。

授業では評論文を理解する上で核となる一文に注目し、筆者が前提として省略している内容を推論して補い、詳述することを生徒に求めます。

詳述課題例

問い(柏木博「しきりの文化論」より)

「わたしたちは、自分が生活している世界を言葉によって組織しているだけではなく、どうやら自分の持ち物によって組織しているところがある」とあるが、これは筆者のどのような考えに基づいているのか。

詳述例

不確かな存在である私達は、「言葉」や「もの」によって他者との差異を明確にし、自分の存在を認識するということ考え。



政治などを論じた評論文の授業はうまく深められないと感じていたところに、尊敬する先輩教師から「辻さんは評論文が苦手だね」と何気なく言われたことで奮起しました。生徒の読みを深められるような評論文の授業をすることが、私の課題になりました」と高校教師時代を振り返ります。

転機になったのは、教育学を研究する大学院に2年間、研修で通ったこと。国語教育学を学ぶとともに、評論文の授業づくりの課題解決に向けた研究に取り組みました。

「評論文の文章の構造や論理だけを追って、段落分けや対比・因果関係の整理に終始する授業では、生徒の理解や思考は深まりません。字面だけを読むのではなく、文章の背景にある筆者の意図や感情まで理解し、もの見方や考え方が揺さぶられるような評論文の授業とはどういふものかを研究しました」

「詳述課題例」の場合、「言葉によって組織する」という箇所が分かりにくいのですが、これは本文を踏まえて「言葉で仕切った認識する」と言い換えれば理解できます。しかし、難しいのは「なぜ、私たちは『言葉』や『もの』で私たちの世界を認識するのか」という、その理由です。「言葉や『もの』が無ければどうなのでしょう。これは本文中に明記されていません。私たちは、『わたし』という存在を自明のものとして認識しているのではなく、『言葉』や『もの』によって、『それとなく』感じているにすぎないことが推論できます。つまり、それくらい私たちの『存在』—実体としての存在の有無ではなく、『自我』『本質的な自分』

読む どう読んだ?

書く どんな意味を持った?

生徒が表現したものから見とる

詳述 書かれていない部分を補いながら...

読みを深めるために 読んだことをどう書かせるか

言葉のすき間を埋める

事例
推論
結論

教育学部
人文社会科学系 教育学部門 講師
辻 尚実

辻 尚実

広島県出身。広島大学文学部卒業。同大学大学院教育学研究科、修士課程修了。修士(教育学)。広島県立大門高校、広島県立広島中学校・広島高等学校などに教諭として勤務。「文部科学大臣優秀教職員表彰」受賞。2024年、高知大学に着任。「高知はお魚がおいしくて、どちらかというと肉派だったのですが、すっかり魚派になりました。しょっちゅう、カツオのたたきを食べています」

言葉の隙間を埋める詳述で 読みを深め、真の理解へ

評論文の授業づくりで先生が着目したのが、書かれていない部分を補いながら詳しく説明する「詳述」という指導法です。評論文の授業では、要約することがよく求められます。しかし小・中学校の教科書教材が児童生徒の実態に合わせて、原則書き下ろされているのに対して、高校の教科書は新書など一般の書籍の一部を抜粋したものが掲載されています。筆者は高校生に向けて文章を書いているわけではないので、筆者が常識と判断したことは説明が省略されます。筆者と知識・教養を共有していない高校生にとっては、前提条件や因果関係などのつながりが分かりにくくなります。そのため、語句や文をつなぐだけの要約はできても、筆者が何を言っているのかわからない、ということがよく起こるのだそうです。



令和6年度
高知大学教育奨励賞
授賞式



担当する「国語教育学ゼミ」の新歓。4年生2名、3年生5名。小・中・高の先生の卵たちです。理論と実践の両輪で、理想の教師を目指して研究に取り組んでいます。3年生歓迎のケーキを囲んで。

もっと国語教育に関わりたから 大学研究者に転身

辻先生は2024年に高知大学に着任しました。高校教育の現場から、研究機関である大学に活躍の場を移した理由は何なのか。

「高校では、学年主任、分掌主任、初任者指導など、国語の授業以外のさまざまな仕事もさせてもらいました。どれも充実したやりがいのある業務でしたが、一方でもっと自分の思う国語教育を追究したい、自分の教職経験や研究を活かして、全国の生徒や先生方の力になりたいという思いが年々強くなりました。そこで、広島県だけではなく、日本の国語教育の在り方や学習指導の発展に貢献できるような研究・提案をしていくために、国立大学の教員公募を探していたところ、この度高知大学と縁がありました。転職活動は1年限りと決めての挑戦だったので、本当に幸運でした」

詳述の研究のほか、文学的な文章において「自己と向き合うこと」や「批評する力の育成」などを研究してきた辻先生。高知大学では、評論文の授業のモデル化に取り組みほか、高知大学附属中学校で短歌創作の授業も行い、生徒をコンクール入賞に導きました。また、辻先生の講義が評価され、学内で優れた授業を行った教員に対して贈られる「令和6年度高知大学教育奨励賞」を受賞しました。

「国語教師には、国語の授業はこうあるべきだとか、こういう授業をしたいといった、国語観や授業観が大切です。大学でこの土台を育めるような指導ができればと思います。そして、教師は常に児童・生徒と向き合う最前線に立っていることを自覚して『学習指導要領』のその先を見据えることを学生たちに伝えていきたいですね」と、国語教師の育成にも力を入れています。

ちよつと加えるだけで、化学反応を効率的に進めてくれる触媒。その地味ながらキラリと光る働きぶりに魅せられ、小河脩平准教授は研究を続けてきました。今はカーボンニュートラルを目指し、斬新な手法に挑戦しています。

触媒は「縁の下の力持ち」

広島県から高知大学に入学して化学を学び、2020年に研究者として母校に戻ってきた小河脩平先生。専門とするのは、様々な化学反応で重要な役割を担う触媒です。「触媒は化学反応を早く進めたり、特定の物質だけを作ったりするときに使われます。例えば自動車の排気ガスには、白金などのレアメタルやレアアースが触媒として作用し、無害な窒素と二酸化炭素、水に変えてから排出します。触媒自体は変化しないけれども、化学反応を効率的に進めることができる。目立たないけどじつはすごい縁の下の力持ちみたいところに惹かれます」とその魅力を語ります。

今、小河先生が進めているのは、主にカーボンニュートラルに関連する研究です。大気中の二酸化炭素を吸収する、あるいは人間の活動で排出される二酸化炭素を回収し、エネルギーやプラスチック原料に変換して再利用する。こうして、二酸化炭素の排出を実質ゼロにすることを目指す取組です。近年、地球温暖化対策として、世界中で積極的に研究されています。「高知県は自然に恵まれていて、再生可能資源が豊富にある。こうした研究をするには、とても適している土地だと思います」



白金をはじめとする様々な触媒。色がついたものより地味なグレー色の触媒が、優れている(気がする...)

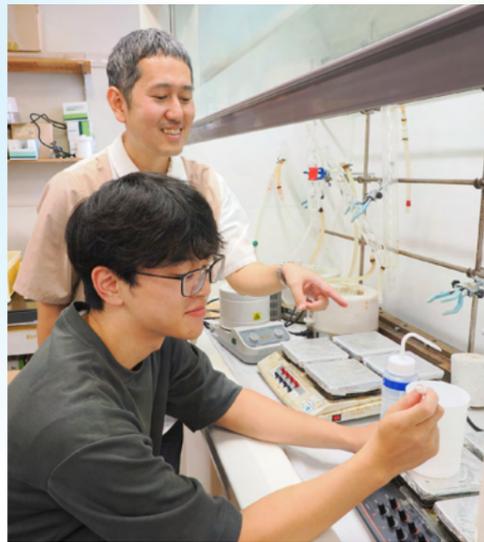
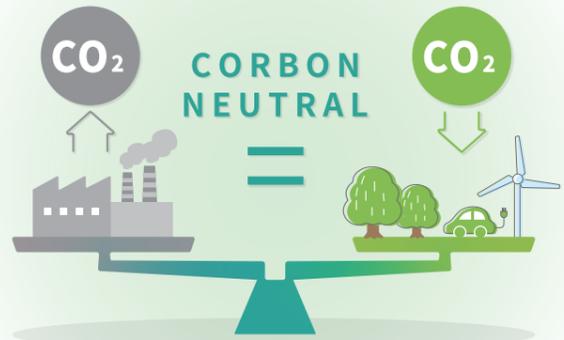
この手法を使うと、太陽光発電や風力発電などの再生可能エネルギーを無駄なく利用することにつながる可能性もあります。これらは天候などによって、生じる電力に大きな変動があり、現状、余った場合は捨てています。こうした余剰電力を使うことにより、カーボンニュートラルの取組に貢献できそうです。また、様々な工場では、100℃程度の熱なら余っています。そういった熱も活用できるのではないかと、小河先生は考えています。

高知大学
研究の
ススメ!

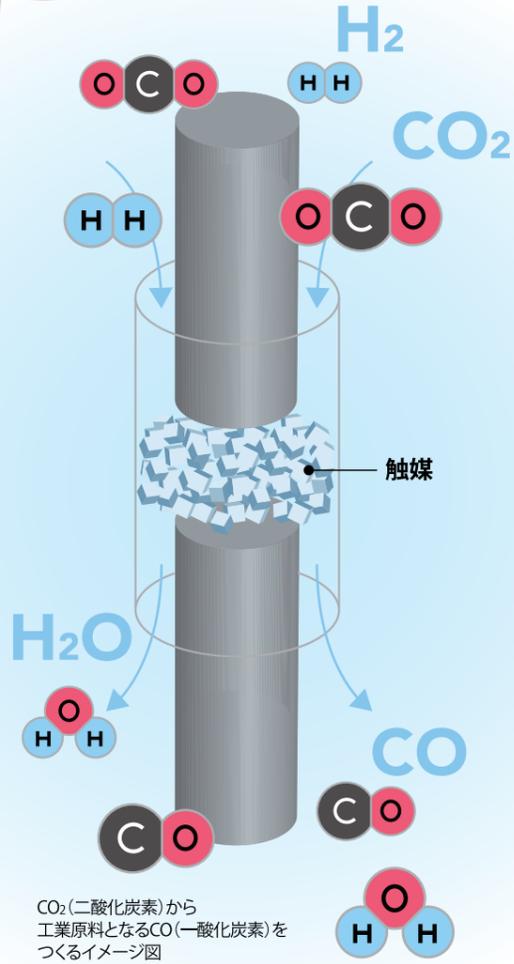
高知大学の研究の「今」をご紹介します。

vol.18

革新的な触媒技術で、
カーボンニュートラルの
実現に挑む!



◀先生が指示をして学生が一から配管を通して製作したオリジナル実験装置。ガスボンベから様々な気体(二酸化炭素や水素など)を供給し、触媒上で反応させる。



CO2(二酸化炭素)から工業原料となるCO(一酸化炭素)をつくるイメージ図

安くても資源も豊富な
鉄を触媒に使う研究も

二酸化炭素を再利用しやすくするため、小河先生は安価な触媒の開発にも取り組んでいます。現在、多くの化学反応で使われているのは白金ですが、とても希少な金属で、価格が極めて高いのが難点。そこで、他の様々な金属で試した結果、意外なもの触媒として利用できることを突き止めました。

「触媒に使えるとわかったのは鉄。やはり電気を流してあげると、低温でもよく反応し、白金に負けないほど効率的に働いてくれます。ただ、白金と比べると、同じ反応を進めるのに使う量が5倍ほど多く必要にはなりません。とはいえ、白金とは価格が何桁も違うし、資源としての量も比較にならない。鉄を使うメリットは大きいと思います」

ほかには、エネルギーを効率的に活用するため、貯蔵しやすい液体の形に変換する研究も進めています。こちらは排出された二酸化炭素の再利用ではなく、自然の木などの再生可能な生物由来の資源、バイオマスに関連する研究です。

「圧力鍋のような耐圧の機器に木を入れて、米を炊くように熱すると、100℃を超える水の中に糖が溶け出します。それを触媒の力で変換して、LPガスのような使いやすい液体燃料にします。この研究もやはり、低温で触媒を有効に使うという考え方は同じです」

この研究は、高知県で盛んなハウス栽培にも利用できると考えているそうです。ハウスの中に圧力鍋のようなものを置いて、作物の茎や葉などの残渣を使ってLPガスを発生させ、それをハウスに戻して暖房用の燃料にするというサイクルの仕組みです。これらの小河先生の研究には、研究室に所属する学生たちも大きく関わっています。

一例をあげると、鉄が触媒に使えるという研究は、じつは学生が中心になって手がけたもの。学部生から修士課程を終えるまでの約3年間で明らかにし、学会発表を何回も行ったといいます。また、工場などから排出される二酸化炭素を回収し、低温で触媒を使って効率的に回収変換する研究も進めており、これには学生も発明者として特許を出願しています。

低温のもと電流で刺激する
画期的な技術を開発

小河先生が取り組んでいるのは、排出された二酸化炭素をリサイクルし、プラスチック原料やエネルギーとして利用するための方法です。「二酸化炭素分子は非常に安定です。そのため、触媒を使ったとしても、反応を進めるためには高い温度が必要で、しかし、それでは二酸化炭素をリサイクルするために燃料を燃やし、また二酸化炭素を出すという、本末転倒な仕組みになってしまいます」

では、どうすればいいのか。小河先生は低い温度にこだわって、触媒をうまく働かせることができなかつたかと考えました。その一つのカギとなるのが「電気」だといいます。「効率的に化学反応をさせるには、通常は500〜600℃の高温が必要になります。ところが、触媒に電流を流してあげると、100℃ほどの低温でも同じように反応が進みます。以前在籍していた、早稲田大学の研究室が開発した技術です。その研究室で学んだことを、高知大学で少しずつ改良しながら突き詰めています」

小河先生によって進められている触媒に関する最先端の研究。加えて、高知大学には海洋コア国際研究所もあり、触媒でよく使われるレアメタルやレアアースについても学ぶことができます。「希少な資源のことも、それを応用する化学反応についても学べます。こうした大学は、全国でも高知大学しかありません。これは素晴らしい特長なので、声を大にして言いたいですね」

農林海洋学部 海洋資源科学科・
海底資源環境学コース
総合科学系 複合領域科学部門 准教授
小河 脩平

広島県出身。高知大学理学部(現・理工学部)卒業、同大学院総合人間自然科学研究科応用自然科学専攻 博士課程修了。博士(理学)。広島大学、早稲田大学を経て、2020年、高知大学へ。「入学当時、物質科学科という学科があり、学科名がカッコいいなと思って受験しました(笑)。高知の第一印象は、人があたたかい。学生時代も大らかな先生が多く、のびのび育ててもらいました」



200℃のオープンでも耐えられる水などを密閉できる実験器具。



活躍する高知大学の先輩に
会いにいきました!

HELLO! SENPAL

Vol.9

理学部(現・理工学部)卒
田尻薄片製作所 代表
田尻 理恵さん

どんなものでも 薄く、美しく。 科学の進歩に貢献する 薄片技術者

石が大好きだから 高知大学で地質学を学ぶ

岩石などを削って、厚さわずか0.025、0.03ミリに研磨する「薄片(はくへん)」。向こう側が透けるほど薄くして、顕微鏡で観察できるようにプレパラートにする特殊な技術です。地質調査などに必要不可欠でありながら、日本で習得している技術者は数10人程度。田尻さんの場合、岩石だけでなく、ヒトデやカブトムシの角、サメの皮といった生物、さらに尿路結石や歯までも薄片に仕上げます。オンラインワンの熟練技術者として知られる田尻さんに、これまでの歩みをお聞きしました。

小さな頃から石が好きで、歩きながら色々な石を探して集めるような子どもでした。大学は地質学科のあるところを探して、地元の大阪から割と近い高知大学に進学しました。

科博で配属されたのが薄片を作る部署でした。実習で経験はありましたが、あまり上手ではなくて。正直、ああ薄片か...と思いました。がそんなことはいつてられない。本格的にやってみると、物事に集中して取り組むタイプなので、この仕事に向いていたようです。削っていると、意外な美しい世界が現れるのも面白いと思うようになりました。

その後、結婚して出産し、いったんは科博を辞めました。この時、薄片作りは家でもできるのではと考え、研磨用の機械を買って、地質コンサルタントの会社などから、個人で仕事を受けるようにしました。子どもが大きくなってから、家での仕事は休止して科博に復帰。それから、知人に強く勧められたのがきっかけで、科博から早稲田大学に移り、薄片室の専任技術者として薄片作りに従事しました。

こうした経歴のなかで、田尻さんはまったく新しいジャンルの薄片を手がけるようになります。薄片はもともと、地質学の分野で発展してきた技術。それ以外の用途ではほとんど使われていなかったのですが――。

科博にいた時、海洋生物の研究者から、「海綿を薄片にできませんか?」と相談されました。軟らかい生物などは、通常、そのまま薄く切ってプレパラートにします。しかし、海綿は小さな骨がいっぱいあるので、薄切りにできない。そこで、薄片の技術を使えないだろうかという相談でした。

研磨するには固くしなければいけません。薄片の技術のなかに、泥の水分をアセトンという有機化合物に置換し、それをさら

研究室で学んだのは、当時まだ新しい学説だった「プレートテクトニクス」。地球の表面が何枚かの固い岩盤で構成されていると考える理論です。四国の地質でこの学説を証明しようと、室門市でフィールドワークをして卒業論文にまとめました。勉強のほかに、アーチェリー部に入部して、結構頑張ってる練習しました。試合にも出場し、高知県の個人1位になったこともあります。

卒業後、薄片製作の道に進み 画期的な手法を独自に開発

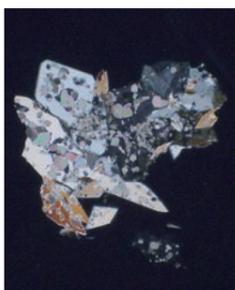
好きな地質学を学び、部活も充実していた田尻さんですが、就職には苦労しました。その頃、地質関連の業界に、女性の就職口はほぼなかったからです。悩んでいたところ、東京の国立科学博物館(以下、「科博」)の研究者と交流する機会があり、「非常勤で良ければ、科博に来ませんか?」と声をかけられました。

に樹脂に置き換えて固めるという2段式の置換方法があります。その技術を応用し、海綿を薄片にすることができました。論文にして2013年に発表しました。この時に編み出した技術は、今も調整しながら使っています。

大阪・関西万博に出展し オンラインワンの技術を披露

2016年、田尻さんは親の介護のために、東京から大阪へと移り住みます。田尻薄片製作所という看板を掲げて、自宅で開業。2年ほど経った時、これまでにない薄片作りを依頼されました。

大阪大学や名古屋市立大学などの共同研究で、尿路結石の薄片を作っていたと声をかけられました。完成した薄片を顕微鏡で見ると、本当にきれいでしたね。薄片にする、化学分析ができるので、色々な研究に使われています。医療関係では、ほかに歯や歯肉の薄片を作り、研究に役立ててもらっています。まだ誰も見たことがないものを作るのは、とても楽しい。また新しい需要があればいいなと思います。



▲尿路結石
これまで粉末にして化学分析を行っていた尿路結石が、薄片技術によって内部の組織ごとの分析が可能となり、組織の成長の様子も観察できるように。



(上) 大学時代はアーチェリー部で活躍
(下) EXPO 2025 大阪・関西万博での実演

たじりえ
田尻 理恵さん

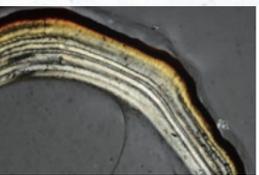
大阪府出身。高知大学理学部(現・理工学部)卒業。国立科学博物館、早稲田大学などで薄片製作に従事したのち、2016年に東大阪市で田尻薄片製作所を設立。2025年、「大阪・関西万博」に出展。岩石をはじめ、尿路結石や動物組織など、幅広い分野の薄片製作を手がける。

田尻薄片製作所 HP



▲マダラクモヒトデ全体像
薄片技術によって、動物の硬組織と軟組織の同一平面上での観察が可能に。色も着色しない天然のもの。

▲アカハナカミキリ腹部



▲カブトムシ角(偏光)



◀歯おやしらず

じつは今、この仕事の後継者になってくれる人がいて、私が開発した技術を少しずつ伝えているところなんです。彼のことを考えると、もうちょっと手を広げたほうがいいかなと。そうした意味も込めて、今度、イギリスの研究者向けの展示会に出展します。また、美術関係の人から個展を開いたらどうかといわれていて、これも考えています。

非常に卓越したレベルにありながら、人の目に触れることはなかった田尻さんの薄片製作技術。「2025年大阪・関西万博」に期間限定で出展し、初めて広く公開されました。万博開催の2年ほど前、東大阪市から「優れた中小企業の技術力や魅力を発信する期間限定の出展企画があるんですが、参加しませんか?」と電話をいただきました。光栄なお話ですし、参加することにしました。

出展したのは「大阪ヘルスケアパビリオン」で期間は7月半ばの1週間。薄片を製作



EXPO 2025 大阪・関西万博での展示の様子

している動画や、尿路結石などのパネルを展示したほか、モニター付きの顕微鏡を置いて、岩石や尿路結石、生物などの薄片を観察できるようにしました。それにポータブルの研磨機を持ち込んで、薄片製作の実演も行いました。

事前にテレビや新聞で紹介されたこともあって、たくさんの方が来場してくれました。うちの展示を見るために万博に来たといってくださいる人もいて、すごくうれしかった。高知大学の同級生やアーチェリー部の仲間も来てくれて、それも本当にうれしかったですね。

大学卒業以来、40年以上も薄片作りを追求してきた田尻さん。高知大学の学生や、受験を考える高校生にメッセージをいただきました。大学で学んだ地質学をはじめとする自然科学は、薄片作りにとても役に立っています。研究者の方の意図が正確に理解できる。これは高知大学で学ばせてもらったおかげです。将来、どこで役に立つかわからないので、好きな分野だけではなく、興味がないことでも、とりあえずしっかりとやっておくことをお勧めします。



大学院での学びを活かし 新しいクラフトジンの開発へ

「マキノジン」企画開発 塩田貴志さん



「土佐FBC」に在籍中 クラフトジン造りを発案

ウオッカなどと並び「世界4大スピリッツ」の1つとされるジン。近年は原料や製法にこだわったクラフトジンが人気を集めています。2021年には、高知県で初の商品となる「マキノジン」が発売。その開発には、高知大学での学びが大きくかかわっています。

マキノジンのプロデューサーは、高知市のオーナーバーテンダーである塩田貴志さん。高知大学が実施している産官学の取組「土佐フードビジネスクリエーター人材創出事業（土佐FBC）」を受講したのがきっかけで、新しいジン造りは始まりました。土佐FBCは食品ビジネスのプロ人材を育成するのが目的。塩田さんは当初、高知で親しまれる酢ミカン（料理の風味付けをする柑橘類）に注目しました。

「当初は黒潮町で栽培されているパッションフルーツをカクテルに使えるシロップにしようと思った。しかしその後、土佐FBCの活動のなかで、酢ミカンの酢をジンで割ったら面白いという発想が生まれて、高知ならではのクラフトジンを造ろうと方向転換しました」と塩田さんは振り返ります。

ジンを造るには、酒造会社の協力が必要。そこで塩田さんは、佐川町にある司牡丹酒造に相談しました。ジンはベースとな



▲司牡丹酒造の蒸留器

るスピリッツ（蒸留酒）に、ハーブやスパイスなど植物由来の風味原料であるボタニカルを加えて造ります。司牡丹酒造からは「大土佐」という焼酎を薦められ、これをベースにすることを決定。複数加える風味原料の柱、キーボタニカルにはスエコザサを選びました。

「マキノジンの『マキノ』とは、醸造場所である佐川町出身の植物学者で、連続テレビ小説『らんまん』（NHK）で主人公のモデルになった牧野富太郎博士をイメージしました。スエコザサは牧野博士が仙台で発見し、奥さんの名前の壽衛（すえ）から命名した当時の新種です。このスエコザサを加えることにより、風味のバランスをうまく整えることができました」

マキノジンは2020年10月に初蒸留し、翌年2月に販売開始。『らんまん』の制作発表と時期が重なったこともあり、2400本が予約で完売しました。



▲実験風景

◀スエコザサ

新高梨の成分抽出のために 大学院に社会人入学

塩田さんは土佐FBCの受講を終えてから、高知県の特産品、新高梨のフレーバー

を使った新しいマキノジンの開発に向けて、高知大学大学院に進学。「成分を抽出するのにエビデンスがほしいと考えました。仕事との両立は大変ですが、大学院に割く時間は午前10時から午後3時までと決めて、時間を配分しながら取り組んでいます。今は修士論文『土佐文旦と新高梨の効率的抽出法』をまとめようと、抽出に適した温度や気圧、湿度などの研究に追われています」

理系出身ではない塩田さんにとって、実験は初体験。とはいえ、仕事と関連した部分もあるそうです。「私は料理も作りますが、実験とは相通じるところが多いと感じています。また、バーテンダーの仕事は、お酒の性質や背景などをすべて把握する必要があり、この点も実験に似ています」

研究と並行して、高知県工業技術センターで試験蒸留も実施。個性の異なる3バージョンを検討中で、これからベストな1本にしぼっていきます。新高梨を使った新バージョンのマキノジンは、2026年4月24日、牧野博士の誕生日に記者発表をする予定です。



大学院修士課程
農林海洋科学専攻
農芸化学コース

塩田 貴志

高知市出身。1990年から「ダンディズム土佐BARクラブ」のオーナーバーテンダー。2018年、「土佐FBC」受講。2021年、高知初のクラフトジン「マキノジン」を販売。2024年、高知大学大学院修士課程に入学。

★ それいけ！プロジェクト

地域から 医療を考える 「シン・家庭医道場」 とは？

高知大学医学部家庭医療学講座

3泊4日の合宿で 自分から動いて地域を知る

人口約650人の山村に、医師や看護師、保健師を目指す学生たちが、民泊も含めて3泊4日で合宿。地域とその医療を、実際に見て、聞いて、考えるプログラムが「シン・家庭医道場」です。大学の学びでありながら、なぜ「道場」なのか？「医学を一方的に教わる大学の教室とは違う。武道のように、受け身にならないで、自分から動いて、技をしっかりとかけない」という意味を込めて名づけた」と指導教員である阿波谷敏英家庭医療学講座教授が明かします。

地域の現場を長く見てきた阿波谷先生が2007年、高知大学に着任したことから家庭医道場は始まりました。「医学部にいると、勉強で頭がいっぱいになって、世間知らずになってしまふ危険があります。そうではなく、地域を知って、その中で何が必要なのか、医療従事者として何ができるのかを考えてほしい。将来、必ずしもへき地医療に携わってほしい、というわけではありません。地域の視点を持つことは、大学病院などの医療従事者にも大事なんです」と阿波谷先生は力を込めます。

畑作業やアユ釣り 活動から何が見える？

9月に行われたシン・家庭医道場には19人が参加しました。まず、開催地である馬路村にバスで移動。村長の講演、村の診療所の見学、村民の声を聞き取るフィールドワークなどのあと、10軒のホストファミリーのお宅に分散して宿泊しました。

プログラムのなかでもユニークなのは、2日目からの活動。ホストファミリーなどと一緒、ユス畑の手入れ、建設現場や温泉施設での職場体験、アユ釣りなど、様々な活動を通して村民の生活を知りました。

「医療とは無関係のようですが、じつは地域を知るための重要な手段なんです」と

3日目の夜には、活動を通して知った生活や課題を踏まえて、地域に必要な医療をグループワークで考え、最終日に「プレゼンテーション」を行いました。中には「村内の離れた場所にある2か所の診療所は、電子カルテなどでもっと連携してはどうか」といった具体的な提案も発表されました。

プログラムの最後には、自分が目指す医療を紙に書いて、胸の前に掲げて記念撮影。いわば決意表明で、「患者さん、同僚、自分を

生活背景から診る」「地域を愛し愛される人になる」「人を診る医師に一緒に考えたり悩んだりできる看護師に」など温かみのある言葉が並びました。「評論家のような、一歩引いて見る視点は良くない。自分を主語にして考えることが大事です」と決意表明をさせる理由を阿波谷先生は説明します。

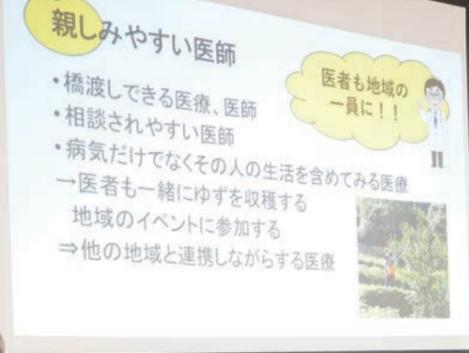
家庭医道場には「実行委員」制度があり、学生が主体的にプログラムの内容を考える役割を担うのも特徴。合宿形式で地域と交流する取組は、医療系の学部ではまだ全国でも例が少ないそうです。来年は30回目の開催。医療従事者としてどのように活動していくのか、考えるきっかけになればうれしいですね」と阿波谷先生は語ります。



▲馬路診療所の見学



◀高知大学医学部
家庭医療学講座は
こちら



上：ホストファミリー宅にて
中：建設業の職場体験
下：グループワーク



医学部
医学教育部門 家庭医療学講座 教授

阿波谷 敏英

高知県出身。自治医科大学卒業。大月病院、椿原診療所、椿原病院院長、高知医療センター総合診療部長などを経て、2007年、高知大学に着任。「地域に飛び込むと、学生は大きく成長します。地域の人と一緒に学生を育てることが、これからの医療に大事だと思います」

高知大学とイオン株式会社との連携協定締結について“産学官民”で南海トラフ巨大地震に対応する防災モデルを構築

国立大学法人高知大学(学長:受田浩之)とイオン株式会社(取締役兼代表執行役社長:吉田昭夫)は、防災および環境などの分野で相互に連携し、地域における持続可能な社会の発展に寄与することを目的に連携協定を7月25日に締結しました。

本協定により、南海トラフ巨大地震を想定した水害などの対応を高知大学とイオンが連携し、イオンモール高知をBCMモデルとして位置づけ、今後はイオンモール高知にて防災訓練を実施するほか、近隣住民の方への防災やローリングストックなどの啓発・教育活動も実施する予定です。

また生活に密着したサーキュラエコノミーモデルを地域事業者、地域住民の皆さまと協力して構築し、環境や省エネについてもイオンのファシリティマネジメント(施設と周辺環境の管理)を担うイオンディライト株式会社とともに連携を図ります。



全日本女子オープンレスリング選手権大会で櫻井つぐみさんが優勝しました

大学院スポーツ・芸術文化共創専攻1年の櫻井つぐみさんが、2025年10月12日に静岡県焼津市で開催された第18回全日本女子オープンレスリング選手権大会で、優勝しました。

本大会は、国内トップレベルの選手が集結する全国規模の女子レスリング大会で、櫻井さんは2024年のパリ五輪後初めての試合に臨み、無失点で頂点に立ちました。



写真中央が櫻井選手

救命処置に対する感謝状の授与について

9月27日、地域協働学部実習授業にて大阪関西万博を訪問中の地域協働学部2年菅野真さん、池田章悟さん、大石晴斗さん、山下功祐さんの4名が会場内で倒れた来場者の救助に当たりました。救急隊が到着するまでの間、心臓マッサージ(胸骨圧迫)やAEDの操作、各所への連絡などを行い、10月5日、大阪市消防局此花消防署と公益社団法人2025年日本国際博覧会協会危機管理局より、菅野さんへ感謝状が授与されました。



左から、山下さん、菅野さん、大石さん、池田さん

第79回高知県展において山瀬優奈さん、吉岡弥笑さん、清藤裕香さんが受賞しました

第79回高知県展において、大学院スポーツ・芸術文化共創専攻1年の山瀬優奈さんが、日本画部門の新人賞を受賞し、グラフィックデザイン部門においても入選。洋画部門では教育学部学校教育教員養成課程美術教育コース2年の吉岡弥笑さんが山脇信徳賞を受賞し、清藤裕香さんが褒賞を受賞しました。

また、山瀬さんは第79回徳島県美術展(県展)の日本画部門でも入選しました。



吉岡弥笑さんの作品 山瀬優奈さんの作品 清藤裕香さんの作品

中国・陝西科技大学の黄剑锋学長らが受田学長を表敬訪問されました

2025年9月25日、中国・陝西科技大学の黄剑锋学長をはじめとする一行が、受田浩之学長を訪問されました。

陝西科技大学は、中国・陝西省の省都西安に位置する総合大学で、8つの学院(学科)、24,000人以上の学生を擁しています。当日は、受田学長から、本学の目指す「地域を支え、地域を変えることができる大学」の実現には、信頼のおける国際的なパートナーが不可欠であり、長きにわたる陝西科技大学との友好をより深めることへの期待を述べられました。続いて、黄剑锋学長から、歓迎に対する御礼が述べられ、今後の交流に向けた意見交換が行われました。

意見交換においては、同大学への本学博士課程学生の派遣促進や、短期の文化・学術交流の促進、材料科学、化学工学といった分野での教員交流の推進の可能性について、前向きな議論が交わされ、理工学部附属水熱化学実験所の視察など、両大学間の交流推進が期待される貴重な機会となりました。



エベネザ・オドゥロ・オウス前ガーナ大学長らが受田学長を表敬訪問されました

2025年8月9日、エベネザ・オドゥロ・オウス前ガーナ大学長をはじめとする一行が、受田浩之学長を表敬訪問されました。

エベネザ・オドゥロ・オウス氏は、ガーナ共和国南西部タルクワ出身。昆虫学が専門の研究者で、本学の農学研究科修士課程(当時)に進学。帰国後、ガーナ大学の要職を歴任し、学長も務められました。

今回の訪問は、同氏と民間国際交流団体との交流にあわせて行われたもので、当日は、IoP共創センターの取組視察や、本学とガーナ大学との交流について、従来の農学分野にとどまらない、発展的な交流を行うための意見交換が実施されました。

8月11日には、第72回よさこい祭り高知大学演舞場の観覧のために再度ご来学。学術交流のみならず、日本とガーナ間の文化交流の貴重な機会となりました。



設置から10周年 地域協働学部

10周年記念 TOPICS

改組から10年目 人文社会科学部



地域協働学部1期生

「信頼」に基づく関係づくり

学部創設時からの実習先に何うと、決まって「第1期生の〇〇さんは、元気にしゅうろうか」「〇〇さんからは、今でもときどき連絡があるがよ」といった声をいただきます。地域の皆さんが、学生たちをまるでわが子のように、ずっと気にかけて下さっている。なんとありがたいことでしょうか。また、県外に暮らし、休暇を利用して久々に大学に顔を出した卒業生が、お世話になった実習地に挨拶してから帰るという。関係人口という言葉がありますが、この10年、私たち地域協働学部の教職員が描いてきたもの一つは、こうした人と人との「信頼」に基づく関係づくりであったことを実感します。大学が地域社会に出来ることには限りがありますが、地域協働学部が果たしてきた役割を問われるとすれば、地域を大切に思う学生たちを世に数多く輩出していることではないでしょうか。少子高齢化が加速化する地域の実情は一段と厳しいものがありますが、だからこそ地域を大事に出来る若者たちを増やしていく。創設時の原点を忘れることなく、この先の10年に対応していきたいと思っています。

地域協働学部長 内田 純一

今年、実習地として区切りを迎える稲生実習班

地域協働学部の学びの軸は600時間を超える地域実習。2期生から毎年学生を受け入れている南国市稲生地域は今年度で「実習地」を終了します。地域の方と学生の声を伺いました。

● 地域の声 「チーム稲生」顧問 前田学浩さん

最初は模索の繰り返しでしたが、徐々に活動の方向性がはっきりしてきた印象です。学生は入れ替わりますが、信頼関係は積み重ねて構築されていきました。数々の取組の中でも4期生の地域の歴史を伝える「写真集」づくりは印象的です。一軒一軒まわって懐かしい写真を集め、地域で展示。出来上がった写真集は、稲生地域の全戸に配布されました。地域の運動会で毎年ピリだった集落が、学生が入った翌年の運動会で優勝!なんて奇跡も見えてきました。「地域を支え、変える」活動がある程度できたのではないかと、という判断で実習地として卒業になりましたが、来年度から地域がどうなるか気になる所です。

● 学生の声

地域協働学部稲生実習班3年生(9期生) 足立風薫さん、室結子さん

稲生地域を選んだのは、地域が本当に必要としているものに沿った活動をしている印象があったからです。最初は自分たちの代で最後になると思いもよらなかったのに、びっくり。さみしいですが、マイナスな気持ちばかりではありません。今、集大成として2~9期生の活動内容と稲生との協働のプロセスをまとめる「コミュニティブック」の作成を進めています。今後の地域の「次の一歩」として、皆さんの助けになるような1冊にしたい、という思いで頑張っています。



稲生地域での実習の様子

在学生と同窓会が計画! 創設10周年イベント

地域協働学部同窓会は、2019年3月に1期生の卒業とともに発足しました。卒業後も「あの空気感って特別だったよね」と感じる、地域の方や先生方、実習を共にした仲間とのつながりが、この学部には残っています。同窓会を立ち上げたのは、そんな「縁」を一度きりで終わらせたくなかったから。大学時代に出会った人たちが、地域での学びを卒業後も持ち寄り、語り合える場をつくりたい、そして在校生にもその思いをつないでいきたいと考えています。10周年という節目は、そうした想いをカタチにする絶好の機会でした。11月の黒潮祭に合わせて行うイベントが、世代を越えたつながりを生み、それぞれの歩みを励まし、新たな協働のきっかけになることを願っています。



地域協働学部10周年記念イベント学生実行委員



「知の共同体」としての学部づくりを目指して

人文社会科学部は、専門的・学際的教養を備えたグローバル/ローカルな課題解決の担い手づくりを目指して、2016年度に人文文学部から改組しました。この10年間は、EPIC(英語特別プログラム)、OASIS(自律学習支援センター)、多文化交流コーディネーター養成プログラム、学際的研究プロジェクトの他、日本語教員養成課程では国家資格化を進める等、多文化社会を見据えた教育実践を続けてきました。また、教職員だけでなく、学生や学外関係者も参画する学部づくりを目指して、ステークホルダーとの協議会や学部向上委員会を立ち上げました。従来の価値を問い直し、再構築する力の源泉となる人文社会科学の役割が一層求められる時代。人文社会科学の「知の共同体」としての役割を発揮すべく、これからも前に進んでいきます。

人文社会科学部長 岩佐 和幸

特徴的な取組



日高村での文化交流の様子

● 多文化交流コーディネーター

本学において「国際人材育成」の一貫として2022年度に新設された称号で、「多様な文化や価値観を理解し、多様な人々との交流を企画・運営等を含んで実践できる人物」を大学が認定するものです。地域文化交流、グローバル文化交流、多文化共生社会の構築に関わる国際的な、あるいは地域社会での活躍が期待されます。

● 人文社会科学部向上委員会

人文社会科学部をより良くするために学生の意見を聞き、教員と対話する「人文社会科学部向上委員会」を設けています。学生と教員、学生同士が対話できる「場」を設け、人と人とを繋げ、交流するための仕組みづくりに取り組んでいます。



向上委員会での学生と教員の対話

● 上記以外にも、学部それぞれが多様な関係者と協力しあい 研究教育の場/フォーラムを広げています。

- ・ステークホルダーとの協議会
- ・保護者向け就職活動説明会・懇談会
- ・高知人文社会科学会
- ・外国人労働者と地域社会包摂一受入・送出双方向からの展望
- ・「フォーラム型知の拠点」としての高知大学の構想と実践